

# ふくらく通信

2013年 第1号 2月20日発行  
 総号数 61 発行人 菅野香織

震災を振り返ると、内陸部でも各自の備えや心構えは足りていたのだろうかと思えやられる。  
 津波被災者のように、命からがら逃げた人々を優先して助けらるには比較的被害の軽い地域で慌ててはいられない。

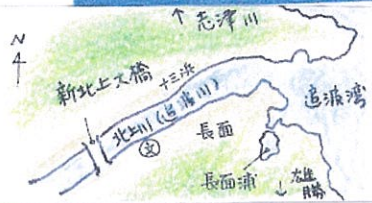
震災と再生  
 痛みから輝きへ  
 もうじき、震災から2年となる。  
 漁業や農業、商店の再開が少しずつ増えてきた。一方で片付けや行方不明者を探す努力も続いている。  
 沿岸部はまだ傷んだままの姿。安全を考えた土地の整備も、家々の再建もこれからだ。

## 石巻市長面付近 ～ 2012年7月2日の記録より～

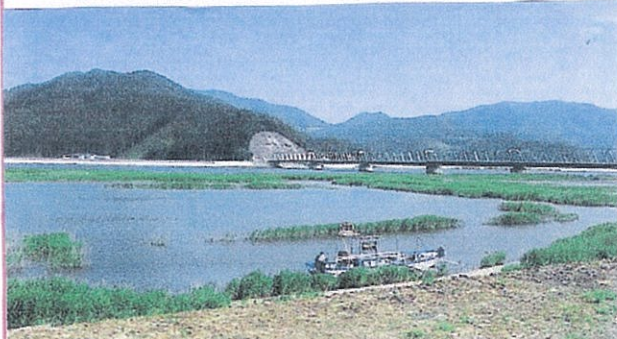
おぼろげに追波湾へと流れ込む北上川(追波川)は、それは見事な葦原を育み中たりとして、人ほ小さく、屈託も溶け流れるように思うほど、広々と満ち足りた光景であった。

だが、あの日の津波は、葦原も、河畔の家や学校も押し潰していった。

新北上大橋が、大きな川の左右をつなぐ。この大橋も、津波の力の一部が欠損し、緊急修復された。



同じ轍を踏まぬよう、津波被災地のことを見聞きし、振り返って考えよう。それを、河かを汲み取って欲しい。  
 それを、生きて乗り越える力に、つなげるよう願っている。



橋の袂に、大川小学校が見える。ここは、何とかは助かったが、その教師と児童が津波に消えた。

公表されている証言からは、どこへ逃げたらいいか、次にどうあるか迷っていた様子が浮かび上がる。なぜ判断が遅れたのか、失った命の重さと思えば、口惜しく考えにはいられない。

大川小学校は、背後に山があつた、湾が見えず、前には北上川がゆったり流れている。

この地帯では、おそらく普段は海を意識しない。津波への危機感も薄らぐかもしれない。

それでも、最も近い高台、裏山への避難経路の確保、避難場所の整備を計画しておくべきだ。

2012.7/2 ↑ 北上川(追波川)・新北上大橋  
 2012.7/2 大川小学校 → 上階窓や内部が壊れている。



しかし、災害への対応は、学校だけでなく、地域全体で取り組むべきことである。失った人々を思うと、本当に本当に七かない。その人々が、私たちに伝えようとしていること、教えたことは何だろうか。考えよう。命を守るためにできること。避難できる道や、避難場所は用意されているか。誰に何の責任が追求されるのではなく、どうすれば良かったかを検証し、地域全体の災害対策を練りたいと、切に願う。

北上川(追波川)は今、中たりとして、ゆったりと追波湾へと注ぐかつての姿を取り戻しはじめています。  
 浮かすように、川の中に茂る緑が、新たに姿を現している。  
 それは、生きることの輝きを、私たちに伝えている。  
 再生することは、失った者への感謝と敬意を込めた、かへの努力に報いること。そう語っている気がした。



2012.7/2. ← 新北上大橋から河口を望む  
 地元の人々が手入れしてきたヨシ原  
 再生の努力も感じられる